

自分をさがす 旅にしよう

やすら樹

No.

50

1998 July

特集
・ 村瀬孝雄先生を偲んで

発行 自己発見の会



星があんなに美しいのも、

目に見えない花が

一つあるからなんだよ……。

サン・テグジュペリ ※

※ サン・テグジュペリ 作家 (1900-44)

内観とは

内観とは、身近な人々（母または母親代わり
に育ててくれた人、父、配偶者など）に対する
自分を見つめるために、①していただきたいこと
②してさしあげたこと ③迷惑かけたこと、に
ついて、具体的な事実を過去から現在まで調べ
る方法です。

内観は新しい自己を発見し、人生をリフレッ
シュする自己啓発の方法として役立っています。
さらに非行、不登校、夫婦の不和、うつ状態、
アルコール依存など心のトラブルに対する心理
療法としての価値が認められています。

現在、日本各地やヨーロッパに内観研修所が
開かれ、一週間の研修の世話をしています。ま
た一日内観や二泊三日の短期内観、家庭や学校
で行う記録内観などいろいろな形態の内観が開
発され、内観法は新たな展開を見せています。

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

自己発見の会顧問・学習院大学教授の村瀬孝雄先生が、平成十年四月一五日に永眠されました。六七歳でした。そこで、今回の「やすら樹」では「村瀬孝雄先生を偲んで」という特集を組んで、村瀬先生のご生前の功績を偲ばせていただくことになりました。尚、特集の最後にご夫人の村瀬嘉代子先生が告別式であいさつされた「会葬の御礼」をご夫人のご好意により、そのまま掲載させていただきました。

感謝

自己発見の会会長

長 島 正 博



眞 摯

村瀬孝雄先生には自己発見の会設立当初から顧問をお願い致しておりました。

原稿依頼の件でご自宅へ電話致しました時に奥様が出られて「うちの主人はカチカチ山のタヌキです」と、おっしゃいました。原稿に追われて、ハワイで執筆に専念されることもあったようです。そんな超多忙であるにもかかわらず、ささやかな機関誌「やすら樹」をすみずみまで

目を通していただきましたようです。私の勝手な思い込みで、間違った記載をした時に、それを発見してすぐに連絡していただきました。そのお陰で事なきを得ることができました。

私が逆の立場だったらできそうにもない懇切丁寧な対応をしていただき恐縮すると同時に、その眞摯な態度に心を打たれました。

「内観と死」

今から十年前、一九八八年八月二日に臨床心理の大会で村瀬先生は「内観と死」というテーマで講演され、その録音テープがあります。このテープは柳田鶴声先生（瞑想の森内観研修所）

からお送りいただきました。村瀬先生がこの講演を引き受けられたのがその年の春。その時の心境を次のように述べておられます。

「私はここ二〇年来、内観の研究をしておりまして今までのような方に内観の話をして参りました。けれどもどうしても、もう一つこれでお話せたと、自分で本当に納得できるものをお伝えできたという思いがありませんでした。それで、これを機会に私自身がやはりもう一度内観する必要があると思ひまして七月一四日から二〇日まで一週間内観をしました」

村瀬先生が二〇日に帰宅されますと同居しておられたご母堂が風邪で伏せておられました。先生は「年だから大事にしなきゃいかんかなあ」という程度で特に心配もしなかつた」とのこと。しかし、ご母堂は日一日と具合が悪くなられ、同月二七日に亡くなりました。その初七日の日は先生の講演される八月二日と重なりました。さらにその前日、八月一日に内観法を開発され

た吉本伊信先生が逝去されました。

そういう情況の中で「内観と死」について講演された訳ですが、私はそのテープを拝聴して大変感銘を受けました。そしてこのテープを是非内観に来られた方々にも聴いていただきたいと思ひ、村瀬先生にお会いした折にお願いしましたところ快く許可してくださいました。このテープのお陰で多くの内観者が内観を深める契機を得ておられます。

反 省

昨年五月の第二〇回日本内観学会大会で村瀬先生が「内観研究三〇年を振り返って」と題して講演されたのが私たちへの遺言となりました。その講演の最後に「これまでのように研究者と実践家がバラバラに動いているという状況は必ずしも望ましくない」と指摘されたことは私にはショックでした。今後は心して遺志を受け継いで参ります。先生にご縁を賜りましたことを心より感謝申しあげます。

合 掌

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

「素直」と「清々しさ」を残して逝かれた

村瀬孝雄先生の生涯と研究の足跡

日本内観学会会長 竹元隆洋

日本内観学会の前会長であった村瀬孝雄先生の訃報に接した時、私は腰がくだけるように愕然とした。平成十年四月一五日午後四時五四分のことであったと聞く。四月一八日告別式が行われたのであったが、私はその時、沖繩の内観研究会に頼まれて、一般市民向けの講演をしなければならぬことになっていたため、葬儀に参列することもできず、講演の最中に、心を東に向けて深々と合掌することであった。

吉本伊信先生が内観の生みの親なら、村瀬孝雄先生は内観の育ての親かもしれない。日本内観学会にとっては紛れもなく育ての親として、



第二回日本内観学会から会長として一九九〇年の永きにわたり、内観研究の活性化と学会の発展に尽くされた功績はまことに大きいものがあった。

村瀬先生ご自身の内観研究は昭和四二年（一九六七）に吉本先生のもとで内観を体験されて以来のライフワークのひとつであった。そのすばらしい多くの業績が評価されて、昨年は「日本心理臨床学会賞」を受賞された。そして、昨年の第二〇回日本内観学会では受賞記念講演として「素直と清々しさへの道―内観研究三〇年を振り返って―」という演題で講演の予定だったが、その時は、すでに病状が思わしくなく、会場に登壇することもかなわず、妻嘉代子先生の説明と録音テープを拝聴することになった。

このたび、日本内観学会は村瀬先生の内観に関する研究業績と学会の発展に尽くされた功績をたたえて、「第一回 日本内観学会賞」を授

与することを決定し、平成十年五月三〇日に米子で行われた第二一回日本内観学会大会において授賞式をとり行った。

先生は昭和五年（一九三〇）にオーストラリアのメルボルンで生まれ、小学入学前まで幼年期を英語圏の文化の中で生活したことが後に日本文化と欧米文化との比較文化論や内観研究に大きな影響を与えているようであり、ご自身もそれを自覚しておられた様子である。

昭和二八年、東京大学文学部（心理学専攻）を卒業され、昭和三十一年三月には東京大学大学院人文科学研究科修士課程を終了されて後、東京大学大学院人文科学研究科博士課程に進まれて後、助手の席につかれ、昭和三十三年からは国立国府台病院の精神科セラピストとして勤務された。昭和三六年には米国カリフォルニア大学バークレイ校研究員として二年間の研究生活の後、再び国府台病院に復職され、昭和四二年には国立精神衛生研究所心理室長に栄転された。

それからの先生のご活躍はめざましく、心理学の世界ばかりでなく、精神医学の領域でもその名を馳せる勢いであった。その間、慶應義塾大学大学院（社会学）や、東京大学大学院（医学系）の非常勤講師などもこなしながら、昭和五年には立教大学文学部教授となられた。この年、日本内観学会が誕生して、その翌年から先生には会長に就任していただいて平成九年まで一九年間、お力添えをいただいた結果、今や内観療法が日本の精神療法として揺るぎない位置を占めることができるようになった。昭和五三年刊行の『現代精神医学大系第五卷A精神科治療学I』（中山書店）には先生が執筆された、「精神療法総論(2)」「内観療法」「患者中心療法」の三篇の論文が掲載されている。先生の活躍は東京女子大学文理学部や信州大学人文学部の非常勤講師など、いよいよ広がり始めた。研究業績書としては、昭和五六年「キャンパスの症状群」（弘文堂）、昭和五七年「Cultural

Conceptions of mental Health and Therapy

Marsella」の中で「Sunao: A Central Value in Japanese Psychotherapy」を執筆し、「素

直」というキーワードとその背景にある日本の文化的特質について考察している。昭和五八年

『講座精神の科学・6 ライフサイクル』（岩波書店）を執筆。昭和五九年『心理臨床の探究』（有斐閣）では「来談者中心療法との出会い」と「いかに為すべきか、いかにあるべきか」を

ロジャーズの思想や人間観について論じている。同年『中学生の心とからだ』（岩波書店）、昭

和六〇年には日本心理臨床学会常任理事及び、日本精神衛生学会理事に就任された。同年『性

格の発達と形成』（ブレーン出版）では「青年期におけるアイデンティティの形成」を執筆。昭和六二年には東京大学教育学部教授として遂

に母校に返り咲いた。同年『臨床心理学』（放送大学教育振興会）、同年『岩波講座・教育の方法・9 子どもの生活と人間形成』（岩波書店）

昭和六三年には放送大学教授（非常勤）と日本臨床心理士認定協会常任理事及び同認定協会認定臨床心理士第二号となった。同年「社会と文化・親と教師のための思春期学」（情報開発研究所）では「アイデンティティ」を執筆。平成元年には『異常心理学講座九巻治療学』（みすず書房）では「内観療法」を執筆。同年『性格心理学新講座6 ケース研究』（金子書房）では「中野孝次におけるアイデンティティ再確立の過程」を執筆。同年『岩波講座・転換期における人間3心とは』（岩波書店）では、「心の発達」を執筆。同年『メンタルヘルスブック』（同朋舎）を分担執筆。平成二年には日本心理学会理事に就任。平成三年には学習院大学文学部教授に就任し、日本心理臨床学会会長に就任された。同年『臨床心理学体系第十六巻臨床心理学の先駆者たち』を分担執筆。同年の『第一巻臨床心理学の科学的基礎』では「臨床心理学の基礎」を執筆。平成四年には『臨床心理学体

系第六卷人格の理解②』（金子書房）では「SCT」を執筆。同年『パーソナリティ発達 normally 常と病理』（金子書房）では「パーソナリティの発達」を執筆。平成五年には『内観法入門』（誠信書房）を編集。平成六年には国際内観学会会長に就任。平成七年には『臨床心理学の原点——心理療法とアセスメントを考える——』（誠信書房）を執筆。同年『アイデンティティ論考——青年期における自己確立を中心に——』（誠信書房）を執筆。同年『フォーカシング事始め』（日本・精神技術研究所）を分担執筆。平成八年には、『内観——理論と文化関連性』を世に出し、過去に発表した内観についての研究論文と日本文化との関連性を中心に考察したものを収録した。これは、先生の内観に関する研究の集大成とも言えるべき労作である。これら二四に及ぶ単行本以外の専門誌に出された論文は数え切れないほどである。平成九年には、日本フォーカシング協会会長に就任された。平成十年四月

発行の「内観研究第四巻第一号」に掲載された「素直と清々しさへの道——内観研究三〇年を振り返って」は先生の内観に関する最後の遺言となった。そのタイトルそのままに、先生は「素直」と「清々しさ」の人であった。先生は日本文化の中心的価値観であるこのふたつのキーワードを大切にしながら生きた人生を私たちに示してくださいましたように思われる。あのやさしい瞳を細めながらニーツとして笑われるあどけないまでの表情は「素直」で「清々しい」赤児の顔そのままであった。しかし、こと研究面の討論になるときびしかった。甘えを許さない父親のような瞳が奥の方で光っていた。それだけに先生から誉めていただいた時は、私は赤児のように「素直」に「清々しい」気分になれてうれしかった。

しかし今はもう先生はここにいない。

村瀬孝雄先生、遠くから日本内観学会の今後の発展を見守ってください。合掌

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

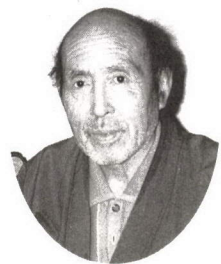
桜散る 無常の風や 賢者逝く

瞑想の森内観研修所 柳 田 鶴 声

私の最も尊敬する村瀬孝雄先生は、ご家族に看取られながら、一九九八年四月、ただ独り黄泉の国に旅立たれました。心からご冥福をお祈り申しあげます。

先生が、日本を代表する心理学者であることは衆目の一致するところであり、今更申しあげる必要もございません。しかし、先生が厳しい求道者であり、また深い内観の実践者であることにお気づきになっていらっしゃる方は意外に少ないようです。そこで私は、この紙面をお借りしまして、皆様に先生の内観者としての一面をご報告したいと思えます。

今から十年前、先生が五七歳の夏、昭和六三



年七月一四日から二〇日まで、一週間の内観の面接をさせていただく光栄に預かりました。まず、屏風を開けて驚いたことは、純白の鉢巻きをして端然とお座りになっておられるお姿です。声も凛として、氣迫溢れる求道者のお姿でした。私は引き込まれる思いで面接をした十年前のその一週間が、つい昨日のような気がしてなりません。問答の内容も、今でもほとんど記憶に残っておりません。鋭い洞察力、豊富な語彙で語る反省と懺悔の告白は、一編の詩や歌を聴いている感じで、私はこの一週間魅了されっぱなしでございました。

(内観直後のご感想からの抜粋)

「今、先生は歳は幾つですか」

「今、五七歳ですが、来月五八になります」

「ここへお出でになりました動機と目的について、お尋ねしたいのですが」

「これまで長いこと内観について話したり書いたりしてきましたが、肝心の私自身の内観体験は二〇年前に二度させていただけでしたので、日頃もっとしっかり一度は内観したいと思っていましたところ、ある学会の大会のシンポジウムで『内観と死』というテーマで発表することになったのと、私自身も人生の今までの流れの中で一つの転機に差しかかっているという気もしましたので、諸々の動機が今回一つに融合して、思い切って内観させていただこうという気になったわけです」

「ではこの一週間の感想をお話ししてくださいますか」

「今まで、何かもう一つ確証が体感的にピンと来てなかった点が、実感として捉えることができ、おかしな安心感といえますか、確信感といえますか、そういう思いが一つあります。それ

からやはりこのところずーっとひっかかっていた親との関係、とりわけ母親との関係に明るいめどがたったというか、そうだったのかと、原因は全部自分だったじゃないかと、そういう思いがしみじみとしております。ですから、これからの生きていく上で、一つの光が明るくなつて、味わいのある暖かい静かな光が射してきたとでもいいでしょうか、そんな思いがしております」

「内観と死」―村瀬先生の講演より―

内観は広い意味の心理療法ですが、もともとが宗教と縁の深いもので、つまり「人間は死んだらどうなるか」と死をとり詰めるというふう

に内観の創始者吉本伊信先生は常に言っておられまして、非常に実存的な療法です。
しかしやはり研究というだけでは、自分が本当に納得できるものをお伝えできたという思いがありませんでしたので、私自身がやはりもう一度内観をする必要があると思ひまして、今回

内観をしてみました。

帰ってまいりました時に、一緒に住んでおります母は風邪で臥せっていたんですが、歳でするので大事にせにゃいかんという程度で、特に心配もせず、私はシンポジウムの準備をしました。しかし日一日と具合が悪くなってきまして、七月の二七日、水曜日に母を喪うしないました。

この際敢えて、私の一番身近な母の死をテーマとして、私自身を事例として、私自身を研究者として、提供させていただくことにしました。非常に個人的なことになるわけですが、「個別的なことから普遍性に到る」というのが我々臨床の基本的な一つの考え方だろうと思います。厳密に言えば母の死からまだ一週間経っていないわけでした、客観化していく上ではあまりにも時間が熟していないという思いがありますが、しかしこういう機会に私の個人的なことをお話しすることをお許しただきたいと思えます。

母は僅か一週間寝込んだだけでございまして、

その一週間の間に、いってみれば人間が自然に死んでいく姿を凝縮して示してくれたんではないかと思うんです。自宅で、私たちに看取られて亡くなりましたので、近頃こういう経験をもてる機会というのも非常に少なくなつたかと思えます。そういう意味でも母への供養と思ひまして、報告いたします。

最近の母に対して調べていた時なんです、ここ一年ぐらい母の背中が急に丸くなつてきたんですね。私は確かに「痛いだろうなあ、辛いだろうなあ」という同情の思いはありましたが、反面では、これはもう歳とってきたから仕方がないことじゃないか、日頃あまり姿勢も良くないことだし、慣れればいづれ辛くもなくなることだろうと、そんなふうになんか他人事のように思っていたという思いも正直言つてあったのです。ところが内観をしてみまして愕然としたことはですね、八〇年にわたつて生き抜いてきた、そして母親が背負つてきました過去の重荷その

ものが、あの背中の姿に現れていたんじゃないかと。しかもその八〇年の大部分、四五歳の時に私の父を失い、その後、私たち兄弟三人を育て上げました、その苦労はほとんど誰にも母は語ってこなかったと思うのですが、その辛さが、その苦労がああの中になって出ていた、そんな当たり前のことが五七歳にもなって今回内観するまではほとんど思ったことがなかったのです。

内観を通して、母の気持ちにやっと少し近づくことができ、同時に自分が今まで母親をどこかで遠ざけていたということにも気づくことができました。私は比較的親しいの息子だと思っておりました。しかし、非常に基本的なところでそうではなかったという思いがして、屏風の中で泣き伏せていた時間がありました。

風邪で寝ていた母は、次第に食欲がなくなりまして、こんなことは初めてだとしきりに気にしておりました。早く元気になりたいと、確かに焦っている気持ちはあったんですね。それに

対して私は「焦るのが一番いけない、静かにしていればまた元気になる」というふうに力づけていましたけれども、今思いますと、あの時あんなに食欲のなさを気にしていた母は、やはりどこかで非常に深く死を畏れ、死を予感していたのではないかと思えます。

私は、内観をした直後であったにも関わらず、そこまでわかりませんでした。力づけたといえば確かに多少の力づけになったかもしれないが、しかし、母の辛さを、息子が、本当のところは十分に感じ取ってくれなかったということ、きつと寂しかったろうと思えます。でも母は「そうね」と静かに頷いてくれたんです。

その頃になりますと母は、私にはあまり話をしませんでしたけれども、妻とか、お手伝いの人たちに、しきりに自分の幼かった時から結婚してその後の様子というものを話すようになっていたんですね。いってみれば自分の一生を総括・統合していたんではないかと思えます。

死ぬ前日には、家内が母と枕を並べて、添い寝をして、話を一晚中聞いてくれたんですが、ほとんど母は眠ることなく来し方行く末、様々なことを話し続けて、そして「もうこれで任せられる」というようなことを言って、いわば母自身が内観をしていた節もあるんですね。姑が自分が看取ったときのことを反省したりしてあったそうです。そして亡くなった当日の朝方まで話し込んで、その後うとうと休んだという一日でした。（心理臨床学会での講演より抜粋）

こうして、内観した一週間後にお母様がお亡くなりになり、また、その四日後には吉本伊信先生がお亡くなりになるという、僅かの時間の間に人生の大恩人を二人失ったわけです。

先生は後日、「人間は、何か自分の目に見えないところで生かされているんでしょうね」としみじみおっしゃったことがございました。まさに無常を深く感じ取ったお言葉でございました。

そして、五年後にはご自分も病気になる、その後僅かの間に何かに導かれるように精神的に沢山のご著書を書き、自分の集大成を揺るぎないものにして、後進に道を拓いて逝かれました。私が最も感心したのは、先生のように功なり名を遂げた方が、五七歳にもなつて、真剣に内観をした事実です。

人を見て法を説く

村瀬先生には沢山の書籍を頂戴しました。

大半の内容は、一見内観には直接関係の無いようなものばかりで、難しい心理学や精神医学等の本ではなく、主に歴史年表・経済史・風俗史等々でした。しかし、熟読してみると、自分の内観や面接には大変役立つものばかりでした。今でも折に触れて読んでいるものに『明治・大正・昭和値段歴史年表（週刊朝日編）』があります。内容は明治から昭和の終わりにかけてのあらゆるものの値段の推移を集めたものです。

例えば、新聞購読料が昭和一六年で一元二〇

錢、二〇年で二円七〇錢、二九年で三三〇円、
五三年で二千元、六一年で二千八百円。

白米十キロ、昭和二〇年で六円、三〇年で八
四五円、五二年で三千元。

小学校教員の初任給は、昭和二三年で二千元、
五二年で九万二千八百円。というようなもので
した。

これを読むと、当時の暮らしが手に取る
ようにわかります。

先生は「内観の実践の仕方は、観念や予見を
排し、あくまでも実証に基づいた事実を追求し
て得る、自分自身の実像を確認することである」
と確信しておられたのでしよう。そのヒントに
なればと、私には一切の注釈もつけずに送って
くださったものだと、今更ながら先生の知恵の
深さに敬服するのみです。

細やかな心遣い

私は、昭和六一年四月二七日まで、長島正博
先生の面接指導で、一週間の内観をしたことが

ありました。その終了直後から異常な興奮状態
になりました。表現すれば「内蔵が動く。全て
の筋肉が躍る。血が湧き、胸がこみあげてくる」
という感じのものです。興奮は一〇日ほど続き、
仕事は平常に出来ましたが、ほとんど眠ること
ができない、眠っても一、二時間程度という状
態でした。

この仔細を村瀬先生に話し、以後五月一〇日
まで約二週間、毎日話を聴いていただき、介護
していただきました。今考えても不思議なのは、
忙しい先生が毎日必ず電話に出てくださったこ
とです。しかも五月三日には、わざわざ拙宅ま
で来てくださり、話を聴いてくださいました。

顧みれば、先生のご恩は筆舌に尽くし難いも
のばかりです。それに対して私は、何のお返し
も出来ぬまま、先生を見送ることになりました。
本当にありがとうございます。

改めて心から感謝申し上げます。

合掌

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

心の中ではいつまでも

大阪大学教授 三木善彦

1. 弔電を打ったとき

村瀬先生を失ったことは、内観学会としても私個人としても、まことに残念で悲しいことです。お葬式に際して日本内観学会事務局の任務として、嘉代子夫人へ弔電を打ちました。

「孝雄先生のご逝去の報に接し、まことに残念に思います。日本内観学会会長として二〇年間、学会の発展に寄与してくださったことは、感謝に耐えません。遺こされた者たちは先生の遺志を継いで、研究と実践に励みたいと思います。安らかに眠りください」

電報を打つとき、電文を短く区切って伝えると、NTTの女性係員がそれを丁寧に繰り返し



2. 村瀬先生との最初の出会い

て確認してくれましたが、彼女も悲しみに同感してくれたような気がして、不覚にも涙がこぼれました。

たしか昭和四三年だったと記憶しますが、私の修士論文「心理療法としての内観法の一研究」（内観研修所、昭和四二年）を吉本伊信先生に出版していただきましたが、それを読まれた村瀬先生から「上京の折りに一度会いたい」との連絡がありました。

当時、村瀬先生は千葉県市川市にある国立精神衛生研究所（現在の国立精神・神経センター精神保健研究所）に勤めておられ、研究室を訪ねました。先生はご存じのように日本の臨床心理学の歴史の証人のひとりで、第二次世界大戦後の日本の臨床心理学の黎明期から活躍され、ロジャーズのクライエント中心療法を学び実践

されていましたが、日本生まれの内観にも早くから注目し関心をもっておられました。

その夜は、ご自宅に泊めていただき、嘉代子夫人の手料理をご馳走になりました。奈良の古寺の仏像のような顔だちの夫人は、おだやかに歓待してください、心がほぐれました。

後年、私の父が死んだとき、孝雄先生に電話したらご不在で、代わりに夫人が出られ、私が「父を失ってとても悲しい」と話すと、やさしい静かな声で「いくら高齢で亡くなられても、唯一のお父さまですもの、悲しくて当然ですよ」と慰められた。こちらの身になって共感してくださる言葉がうれしくて、ノイローゼになったときは、ぜひとも嘉代子夫人にカウンセラーになってもraitたいと密かに思ったものです。

内観を縁に、村瀬先生ご夫妻の知己を得たのは私の人生にとって大きな宝物です。

3. 内観学会や心理臨床学会での活躍

一九七八年、日本内観学会が結成される時、

村瀬先生も大いに賛成してください、学会規約を定めた第二回大会からは初代の会長になっていただきました。それから今日までいろいろな問題がありました。ご相談すると大所高所から、柔軟な発想の答えをいただきました。

また先生は日本の心理学界では最大の会員を擁する日本心理臨床学会の理事長としても活躍され、内観研究のかたわらフォーカシングの実践的研究にも取り組みました。これらの功績を讃えて、一九九六年に日本心理臨床学会賞を受けられたことは周知のことです。

ご病気になられてからも、先生は残された時間と競争するかのよう、内観の論文をまとめて『内観 理論と文化関連性』（誠信書房）を出版し、VTR『フォーカシング―心とからだに耳をすまます―』（創元社）を制作するなど精力的に仕事をなさり、旅立っていかれましたが、私たちの心の中ではいつまでも生き続けてくださることでしょう。

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

最後の絵はがき

渡辺 万津子

異界にお旅立ちになられた村瀬孝雄先生と同じ生と死のあわいに棲む住人の私にいただいた先生の最晩年の絵はがきは、私個人へのメッセージに止どめるべきものではなく字数の許す限り述べ、先生に限りない感謝を捧げたいと思う。一九九六年二月一八日、東京は夜来の雪で、すっぽりと包まれていた。私は、前日送られてきたばかりの、村瀬孝雄先生のご本を丁寧に読み始めた。

内観関係の論文を中心におまとめになった、『内観 理論と文化関連性』である。かつて、『精神医学』で発表された内観療法をはじめ、折々に発表された論文も収録されており、その

都度、私の浅い内観に対するあいまいさを解きあかしていただいた。

「素直と日本の宗教的な伝統」の論文の中で、先生は、西欧世界で学んだ心、精神、意識では説き明かし難いものを神道の考え方により取り上げられた。私は個人的に母が神職の家の人だというご縁からか、内観のあとの清々しさに、水・塩・鏡に象徴される神道に通じるものを漠然と感じていた。内観がより深く自分のものとなった。この著作集は、療養なかばの先生が、病む身の不自由を梃子にして、世界の心理療法界に内観療法の専門家として貴重な遺産を残されたものだ、時を忘れてページを手繰った。

雛に見守られて

翌日になっても雪は止まない。昨年の夏から秋にかけて採取していた押し花を取り出した。ピンク、赤、緑、紫、色とりどりの花々は、自然の色そのままが残っていた。花びらのひとひらひとひらを重ねて、男雛・女雛を作った。桃



イラスト・渡辺万津子氏

の一枝やばんぼりも
添え、色紙に載せた。
ご本のお礼に先生の
元へ春をお届けしよ
うと考えた。

二月二六日付けで
先生から、つつじが
美しく咲いている秋

篠寺の絵はがきをいただいた。「……本当に有
り難うございました。ほのぼのと胸温まる想い
です。三年前と二年前の桃の節句に大病しまし
たが、お蔭様で今年は、このお雛さまに見守ら
れ、元気に過ごせそうです……」素朴な押し花
のお雛さまに見守られて、桃の節句を迎えられ
るといってお葉書からは、素直さ、清々しさの内
観の世界そのものの生を生きていられる先生が
偲ばれた。

酸素ボンベを友として

第二〇回日本内観学会で予定されていた先生

の記念講演はテープで発表された。「素直と清々
しさへの道」のテーマを掲げ、”根底にある固有神
道的価値”も加わっていた。先生のお声に、お命
をすりへらすような厳しいものを感じた。

先生は第一五回日本内観学会が岡山で開催され
たころから、第一八回を除いて、お目にかかれな
くなつた。私はその年々の学会開催地の神社に参
り、祈り、お守りを受け、先生にお送りするよう
になった。その都度、先生は療養の身でいられな
がら、お心はしなやかに自在で健康的なご挨拶を
くださった。今は最後のお葉書となつてしまつた
のだがミロの描く「母なるもの」の抽象画だった。
「……折角の記念講演だったのでうかがえず、皆
様に本当に申し訳ないことでした。……酸素ボン
ベを友にしながらかも、元気で暮らしていますので
ご休心ください。……」このミロの絵はがきは、
死を背景にした先生の生が私の心にいつまでも輝
いている大切なお形見として、絵に込められてい
るメッセージを私は信じていきたい。

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

恩師を偲んで

横山 公美子

内観療法をはじめ、臨床心理学の発展に大いに貢献された村瀬孝雄先生が亡くなられましたことは誠に残念な思いです。ここに哀悼の意を表します。先生が立教大学で教鞭をとられていらしたとき私は一学生として先生に出会いました、先生の偉大さと人間的魅力に魅せられて、臨床心理学を学ぶことを志し最も人気の高い村瀬先生のゼミの一員に加えていただきご指導を賜りました。そしてフロイト、ユング、ロジャーズ、エリクソンをはじめとする臨床心理学の諸学者の理論の基礎についてご教授いただき、四年生になる前の春休みに、瞑想の森内観研修所の柳田鶴声先生のご指導のもと、初めて集中

内観を体験する機会を得ました。この体験を通していかに自分が自己中心的で傲慢な態度であり、父母をはじめどれだけの人々のお世話になつて育ってきたかということに直面し、罪意識とともに感謝の念で一杯になり、生かされていることを実感しました。このような体験について村瀬先生にお話すると、卒論のテーマに選ぶとよいのではないかと勧めていただき、先生のご指導のもと調査研究を始めました。そして先生の内観についての論文や著書に触れ、日本独特の心理療法である内観の理論や技法の奥深さ、効果の多様性について知るとともに内観の世界への探究心が深まってまいりました。そして内観療法による自己像変容に着目し因子分析という手法を用いて調査いたしました。研究といていただき、度々の相談にいつも快く応じてくださいます、その先生の柔和な表情と趣のあるお声は今でも思い起こされます。卒業後も

内観学会をはじめ諸学会等で先生のご講演をうかがいますことは何よりの励みでした。そして先生とのご縁によって奥様であられる大正大学カウンセリング研究所の村瀬嘉代子先生に師事させていただき、実践的な臨床心理学についてのご教授を賜り、さらに内観についての研究を継続し、ご指導いただきましたことはこのうえなくありがたいことで、その後私が臨床の現場で働く上で、さらにそれからの人生においてかけがえのないこととなりました。

先生は「内観の目指すところはまず自分に対して、そして他人に対して、即ち世界そのものに対して『素直』になることである」と語られておられました。まさに常に真摯で温かいお心で研究に励まれ、臨床の世界でご活躍され、たくさんの教え子を育ててくださいました先生ご自身のお姿が、この内観の目指すところのように感じられます。

先生ご夫妻のご指導を通してのお言葉、そし

て内観療法を通して学びましたことによって、心理臨床の仕事をしていく上で、また挫折しうくなった時に、また個人的には私の家族にとってもどれだけ助けられたかわかりません。今でも日常内観は私の心の支えになっています。先生ご夫妻が昨年出版された著書『臨床心理学と生きること』の中で、「生きることと自律」について論じられておられますが、自己を律する姿勢というこれからの生涯へのテーマを与えていただいたように思われ、深く感銘を受けました。

恩師である村瀬先生ともうお会いすることができないことは何より悲しいことですが、先生にいただいた数々の教えを決して忘れることなく臨床の道で精進に努めてまいりたいと存じます。永きにわたる貴重なご指導に感謝申しあげます。

心からご冥福をお祈りいたします。

◆特集―村瀬孝雄先生を偲んで◆

御礼のことは

大正大学教授 村瀬 嘉代子

このように高い席から失礼させていただきま
すことをお許しくださいます。昨日に引き続き、
本日、お導きくださいました村瀬家の菩提寺、
正応寺ご住職石川到覚僧正、御法助賜りました
職衆の方々、まことにありがとうございます。
心より御礼申し上げます。

また、ご多忙の中、このように多くの方々
亡き主人村瀬孝雄の葬儀にご会葬くださり、ご
鄭重なご厚志を賜りましたこと、誠にありが
たく厚く御礼申し上げます。故人もありがたく
感謝していることと存じます。

ただいま、日本の臨床心理学の道無き道の歩
みを主人がご一緒させていただきました河合隼



村瀬孝雄先生

雄先生、専門
分野は異にし
ながらも、主
人をご理解く
ださり、加え
て主人の療養
生活を支えて
くださいまし
た斎賀久敬先
生より深いお心のこもった弔辞をいただきまし
た。誠にありがとうございます。

お二方の先生はもったいないようなお言葉で、
主人の生前の様子をお話くださいましたので、
私は病のためにこもりがちでございました主人
の胸中を忖度せんたく致しましたことをお伝えさせてい
ただきたく存じます。

主人はオーストラリアのメルボルン市で生ま
れました。全くの英語環境でしたが、家庭の中

でも、幼稚園でも恵まれた幸せな日々であったとよく回想しておりました。小学校入学を前に帰国し、三ヶ月で日本語を自然に使いこなすようになり、周りの人々から感心されたというところでございましたが、それと引き替えに身体は弱くなった、と述懐しておりました。新しく言葉を感じることに集中することによってもたらされるストレスを身をもって実感したようで、後に、心と体の関係に注目するフォーカシングの理論と技法の研究に打ち込むようになりましてのは、この時の自身の体験があるのではないかと存じます。そして、平素から、人様とお話しするときに、ものを書くとき、格別に「ことば」を大切に考えるようになりましたのも、この帰国子女のはしりとしての経験に問題意識は胚胎していたようにございます。

さて、この身体の弱さは高じて十代の後半、消化器障害で長い療養生活を送ることになりました。

した。この時、様々な書物を読み、建築家を志望して、旧制高校では理科におりましたのが、人間のこころの内面に関心を抱くように変わつたと申しておりました。おそらく反対されるであらう、と思いつつ心理学を専攻したい、と申し出た時、「責任をもてるか」と一言尋ねて、信じてくれた父親に感謝し、そのことを折にふれ追慕しておりましたが、二〇才の時、父親は亡くなりました。

経済成長を目指しつつも不安定な時代にあつて、母と弟妹四人、自分も大学生活を続けながら暮らしていく方法として、主人は家庭教師では足りない、そうだ、株式だ、と考え、経済記事を読んでは、通学途中、証券会社へ立ち寄るのが日課であつた、と申します。共に暮らしておりまして、お金に鷹揚で、周りの方から「庶民なのに、給料日を忘れている不思議な人」と評され、経済観念が豊かとは言えない暢気なところがございましたが、ある時「自分の勉強や

遊びを楽しむ青春に、家の経済を考えてエネルギーを使ったから、お金にこだわるのはもうたぐさん」と聞いて、納得致しました。

主人は東大の教育心理学の助手時代、臨床心理学の研究には、実践は必要欠くべからざるもの、と教育相談室を上司のご理解を得て開設しました。やがて、もっと本格的に実践するには、現場の臨床に身をおくことだと、病院の精神科のセラピストに自ら志願いたしました。わが国では佐治守夫先生につぐ病院精神科心理臨床の草分けでございます。当時セラピストなどという職業をお分かりになる人はなく「助手をしていれどこの先生になれたでしょうに」といつてくださるこの世的基準からは自由の人でした。新しい分野で、茫漠とした未開の原野を地図を作りつつ模索して進む苦しさを味わっているようではございましたが、この時の主人を見て、自分の進む道に夢を抱き純粋な志を持

つ意義を教えられました。

一九六七年、主人は中野刑務所の受刑者面接に通っていて、内観という言葉を知り、程なくそれを学ぼうと、吉本伊信先生の許で内観をさせていただきました。それから、内観についての研究を始めたわけでございますが、吉本先生ご夫妻の理想実現に向かってひたむきにご精進されている生き方に深く感服しておりました。やがて、内観学会が発足し、一九九四年に国際内観学会が生まれるまでに発展したことに、本人は巡り合わせと様々な要因の働きに深く感謝しておりました。

さて、主人は東大退官後、学習院へ迎えていただき、少しはお役にたちたいと思っておりましたのに、二年も経ずして、肺を患うことになりました。先頃難病に指定されました間質性肺炎でした。始めての入院中、私は日帰りで岐阜で講演する予定で出発前、病院へ参ったある朝

のこと、主人の命は今日から三日と主治医の先生から告げられました。夜帰京した時には、恐らく人工呼吸器をつけ、話せなくなっているだろう、とのことでした。一瞬、講演をキャンセルしようか、と脳裏をよぎりました。主治医の先生は「今、予定を変更すれば病人は不安になる、汽車の時間です」とおっしゃいました。新幹線の車中から、「軽いホワイトボードと筆記具をお見舞いにもって、病院を訪ねて」と親類へ電話しました。夜病院を訪ねてみますと、主人は微笑みながら「僕持ち直したんだって」と申します。主治医の先生が慎重に投薬時期を選んでくださったこと、その他、様々な要因が奏功したのでしょうか。

主治医の先生は病気の文献を主人に色々お見せくださりました。五年生存率が二〇パーセントという数字も知り、覚悟と姿勢が定まったようでした。主治医の先生は夕刻、「これから研究会に行ってきます。衆知を集めて考

えてきます」とおっしゃってくださるような方でした。医の荒廃と言う言葉もある時にありがたいことでした。平成四年春、何とか社会復帰が叶った時、主人は心の底から感謝し「人様に感謝して、親切にしようね」と申しました。

主人の許で学びたいと希望されている方々、ご迷惑をかけている学習院、主人がいただいている多くの公職の責任の重さ、静かに情熱を傾けている研究に思いを致すと、私は主人を、自分の主人であると共に「預からせていただいている人」と思うようになりました。どこまでこの残された身体の機能を持ちこたえていくか…。

家庭を明るく、食事やその他留意するけれども、いかにも療養生活、管理された生活にしないこと、そうだ、外へ出かけられない分、家庭を外に向かって開こう、と思いました。同じ領域の方々ばかりでなく、全く異なる専門領域の方々、知人の子どもさん、時にはこの世に居場

所が見いだせないで辛い思いをしている青少年の人々、わが家の食卓は、社会に向かって開いた小さな出島でした。私の拙い手料理を押しつけられた方々には申し訳ないことでございましたけれど……。

四度めの入退院の後、昨年のクリスマスの日でございました。私は主治医の先生に病院へ呼ばれました。六ヵ月以内に予期不能な急変が予想されること、しかし、これまで活動できたことと自体、検査結果からは考えられない不思議であって奇跡に近い、それからすると再起ももしや……、と伺いました。秘かに私が懼れていたことでもございました。いえ、主人こそが既にそれを知っているようでもありました。「後は体力をつけることだ、どこまで出来るか」と申し、淡々とした静かな自宅での療養生活でございました。

始めは体力と折り合いをつけながら原稿に手

を入れたり、論文指導をファックスで致しました。やがて、食事を始め、全てを手助けするようになって、愚痴や苦痛を訴えることはなく体力の衰えに連れて筆記具は万年筆からボールペン、シャープペン、最後は2Bの鉛筆と工夫し、一つの動作も幾つかに分解してゆっくり行いました。食事も休み休みとり、一時間半近くかかりました。なるべく家族は枕許で共に食事するように致しました。「わが家の夕食は正式の晩餐会のよう、二時間もかけて」とユーモアで楽しみを見つけました。主人は「時間を自分のために使えるようになったのは、幸せともいえる……」と申しました。

始めは、指圧を、それから静かなマッサージを、そして終わり近くにはそっと触れてそばに居て、というだけになりました。

亡くなる当日の朝、異例のご厚意で往診してくださいる主治医をお迎えするのに、私に散髪を

求め鏡を眺めて満足げでございました。先生が次回をお約束され、午後一時、お帰りになられました。私は主人が一見落ちついたのを見届け、

勤務先へ出かけました。当日は臨床心理専攻課程新入学生の歓迎会でした。「いつてらっしゃい、ごくろうさま」今になれば、最後に聴いた主人の言葉でございます。主人は音楽ビデオを見ていて、呼吸不全におちいりました。帰宅した私は発車寸前の救急車に間に合いました。道中、主人の足にそれまで何時もそうしたように触れていました。足は冷たくなっていきました。

主人の手帳には、自分の毎日の基礎データに混じって、三月も終わり近く、乱れた文字で、感謝、と鉛筆書きされておりました。

「そばにいて」と言う主人の言葉を想い、病理解剖に長男と共に昨日朝、立ち会わせていただきました。想像をはるかに越えた荒廃ぶりの

肺と心臓でした。よく耐えて生きようと努力していたのだと、畏敬の念を抱きました。

三月も下旬になると、自分の仕事はほとんど出来ない状態でしたが、臨床心理士にまつわるよいニュース、若い方の立派なお仕事、就職決定のお知らせ、私の勤務先の評価が上昇中であること、等を我がことのように喜びました。この終わりの日々、主人から「足るを知ること」の大切さ、人の幸せを素直に喜ぶことを改めて学びました。主人の死に顔は、微笑みかけるようでございました。

半ばに残したこと多く、多くの関係者の方に迷惑をかけますことを主人に代わりお詫び申しあげますとともに、私も私事に追われ、大正大学の皆様にご迷惑をかけ、更に幾つかの公職にありながら十分に責を果たせなかったことを申し訳なく存じます。

本当にありがとうございます。ここから厚く御礼申しあげます。